加藤周一著作集

15 加藤周一著作集
上野毛雑文

加藤周一 編集

平凡社

加藤周一著作集15（全15巻）
上野毛雑文
一九七九年一一月二〇日　初版第一刷発行

著者　加藤周一（かとうしゅういち）
装幀　池田満寿夫
発行者　下中邦彦
発行所　株式会社　平凡社
〒一〇二　東京都千代田区四番町四
電話　〇三（二六五）〇四五一
振替　東京八―二九六三九
印刷　明和印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社
定価　一八〇〇円

© 加藤周一　1979　Printed in Japan.
製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい（送料小社負担）。

目

次

I

日本語 5
日本の新聞 11
余は如何にして基督信徒とならざりしか 17
安保条約と知識人 23
花咲ける乙女のかげに 29
日本の休日 34
HOMO VIATOR 40
祝皇孫誕生 46
大学という神話 52
古典劇の問題 58
記憶喪失の幸福 64

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

谷底の風景　70
オリンポスの高みから　76

II

「神は人也」または『古史通』の事　87
記者鑑または『ストーンズ週刊誌』の事　90
民族独立または『バングラ・デシュ詞華集』の事　93
秋風一夜百千年または『狂雲集』の事　96
狂気のなかの正気または『リヤ王』の事　99
はっきりさの程度または『論理哲学綱要』の事　102
低姿勢の哲学または『雑談集』の事　105
詩的幾何学または『シトー派美術』の事　108
翻訳または『ガルガンチュワとパンタグリュエルの物語』の事　111

批評についてまたは『吉田秀和全集』第一巻の事 114
ジャポングレまたは「フラングレ」の事 117
「人間性」についてまたは『デカルト流言語学』の事 120
本文批評または『うつほ物語伝本の研究』の事 123
一八世紀のイギリスまたは「ボズウェル文書」の事 126
廃元号論または『私と天皇』の事 129
日本再考または『夢の島』の事 132
小社会学または『仮名手本忠臣蔵』の事 135
世論操作または『乃木希典日記』の事 139
権力または『一二人の皇帝』の事 142
大きさの話または『野生の思考』の事 145
女の解放運動または『正法眼蔵』(「礼拝得髄」)の事 148
怒る事の大切さまたは『金芝河詩集』の事 151

亡命または『仕事日記』の事　154
至誠または『安楽の門』の事　158
雄弁術または『ギリシア政治演説集』の事　162
言論の自由または『平民新聞』の事　165
動機または『ギリシア神話の象徴体系』の事　168
小説の愉しみまたは『迷路』の事　171
紅茶きのこまたは『実験医学研究序説』の事　174
政権交代または『柳橋新誌』の事　177
神秘主義または『イスラーム思想史』の事　180
今様『東海道中膝栗毛』の事　183
脱神秘化または『胆大小心録』の事　186
戦争または『フロイト著作集』の事　189
転向または『獄中贅語』の事　192

戦争文学または「再び見出されし時」の事　195
信仰または『正宗白鳥全集』の事　199
命短しまたは『人生夢幻』の事　202
多数専制または『自由論』の事　205
その日暮しまたは『ある日の言葉』の事　208
再びヴェトナム戦争についてまたは『くさびら』の事　211
方法の問題または『皮膚科学講義』の事　214
土着文化または『万葉集』の事　217
天喪予または『論語』の事　220
偽善的であることの大切さまたは『ローマ帝国衰亡史』の事　223
海外旅行または『航米日録』の事　226
数字の魔力または『統計を用いて嘘をつく法』の事　229
あとがきまたは『言葉と人間』の事　232

Ⅲ

日本の抒情詩　241
読書の想い出　246
「ネギ先生」の想い出　254
日本人冥利につきる事　262
梨蘭讃美　267
E・H・ノーマン・その一面　271
福永武彦の死　278
私の広告文　281
私の立場さしあたり　298
あとがき　315
初出一覧　318

著作年譜 376
目次総索引 386

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

加藤周一著作集 15

上野毛雑文

I

日本語

今、東京で大きな問題になっていることの一つは、日本語の書きあらわし方をどうするかということである。これがまえにも話したことのあるように、全く独特のもので、昔、中国大陸から来た表意文字と、それをもとにしてつくった表音文字を、適当にまぜて書くのだ。おそらく今の世界で表意文字と表音文字をまぜて使っているのは、朝鮮をのぞけば、われわれの国ぐらいのものだろう。しかも「適当に」といってしまえばそれまでだが、そのまぜ方が一定していない。表意文字つまり漢字の方はいくらでもあり、書く人の好みに応じてどれだけの数をどう使うかも自由、句読点も一定していないから、どこで文句を区切ろうとそれも自由である。学校で君たちの習うような文章構成法はあたえられていない。したがって日本語の文体は、自由自在で、すぐれた文体は、ただ個人の天才がつくりだすものである。

ぼくは君があるときこういったのを今でも覚えている。

——日本語にも文体というものがあるのか。

——もちろんある。

とまず答えておいてから、ぼくはどういう具合にあるのかを考えようとしていた。

——フランス語の文体と同じ意味においての文体ではなかろう。

と君はいった。

あれはラテン区だった。われわれは大学のそばのどこかの店で話をしていたのだ。まわりではフランス語ばかりでなく、すべて表音文字であらわされるであろうところのさまざまの国語が話されていた。ぼくがそのとき日本語の文章にも、フランス語とは少しちがう意味で文体という言葉でしかよびようのない一種の形のあるゆえんを、どう説明したか、もう覚えていない。しかし今いいたいのはそのことではない。そこまでゆかないもっと手前の話である。

日本語の書きあらわし方は、独特のものであるだけに、われわれ日本人には大いに便利な点もあるのだが、また不便な点も少くない。そこでその書きあらわし方を便利なように改めようという思いつきが一方にはある。そういう問題を思いつきで片づけられてはたまらぬから、言葉と書きあらわし方の整理がはっきりつくまで、改革を思いとどまれという議論が他方にある。その二つの意見が、今争っているつまり表記法に関して、日本語の改革論と、保存現状維持論とが、同時にあるということだ。そこまでのところは、不思議ではなく、むしろ当然のことだろう。

ところがわれわれ日本人の特徴は、言葉の問題に限らぬようだが、常識では同時にならびそうもないものを、同時に何でもならべてみせるという、今では身についた器用さにあるらしい。日

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook